
愛しの義弟

楓 紅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛しの義弟

【Nコード】

N7845E

【作者名】

楓 紅

【あらすじ】

私と俺と魔法使いの2段階目です！リリーとの夏休みを満喫しているルナ。だが、突然、ある人物に会う。その人物は、敵なのか・見方なのか？

リリーとの買い物

新しい年。新学期といえるだろう。

まあ、まだ夏休み真っ最中だ。

そして、私はリリーとすごして居る所だった。

「ふわあっ；おはようございます。」

リリーのご両親を見やり挨拶をしながら手伝いを始め。

リリー母「あらあら。ルナさんがまるで娘のようね。リリーはまだ寝ているの？」

「あ。はい。もう時期、起きてきますよ？」

バタバタバタッ！

リリー「ルナ！貴方！また、私の髪の毛を弄ったわね！」

リリーの髪がすごい事になってるのを怒り私の所へとかけ走ってきたリリー。

「嫌。その髪の毛は寝癖でしょ？私が弄ったのは下着の方で・・・。

」

リリー「?!／／／ 何をしたのよ！もう！」

バタバタと再び部屋に戻り着替えをするリリー。

「リリーは意外と低血圧で、自分が何を着てるか見ない確率が高いですからねー。」

にこやかに笑いながら言い。

リリー父「アハハハハッ！ルナちゃんは可愛いなー！男の子だったらお婿に欲しいよ！」

「リリーのお婿になるには、もう少し肝が据わってないと！」

リリー「どう言う意味よ！？」

どうやら着替えたらしいリリーが降りてきて言う。

「こんなお転婆娘は、乗りこなすのは気難しいって言うてるの！」

リリー「言ったわね！」

リリー母「リリー。止めなさい！ペチュニア！ペチュニア？ご飯よ！」

リリーのお母様が、リリーの姉であるぺちゅに声を掛けるも返事は帰っては来ない。

私が、初めてここに訪れた時は顔を赤くして出迎えたが、女だと分かるやと軽蔑したように姿を見せなくなっていた。

「お母様。戴いても宜しいでしょうか？」

リリーの母親の後姿を見ながら問いかけ。

リリー母「・・・仕方がないわねー；食べましょう！」

リリー「戴きまーす。」

「戴きます。」

私とリリーは食事を始めた。

リリー「学校の教材、買いに行きましょうね？」

「ああ。明後日だったね。学校。」

リリーの言葉に空を見つめ呟き。

リリー「しっかりしてよ！ルナは、学校教材がそろうとしても私はないんだから！」

「私のも新しい教材を買うよ。ジェームズたちに会うかな？」

リリー「無理よ！ダイアゴン横丁は、いつも混雑してるもの！」

「そうかな？私は、去年、ジェームズとシリウスとリーマスに会ったよ？」

リリー「それは・・・ある意味凄い確立ね！」

「まあ、あの人たちに会うのはオマケとして置いといて、買い物に

は勿論、付き合うよ。」

リリー「今、地味に酷い事を言ったわね？…ご馳走様。準備をしましょう！」

「うん。ご馳走様でした。」

食器を片付け、リリーの後を追ひ、自分の鞆を取り出し。

「この鞆も古いな；なんか、良いのがあったら買おう。」

リリー「早く、行きましょう！ダイアゴン横丁に！」

リリーは楽しそうに、告げながら自分のバックをかける。

「そんなに慌てなくても、ダイアゴン横丁は逃げないよ。」

言いながら、部屋ノブを回した。

ペチュニア「お母さん！ご飯・・・！」

扉を開けた目の前に、ペチュニアさんが居た。

「・・・どうも。こんにちは。」

目の前の人物にちゃんと挨拶をしたが・・・。

ペチュニア「魔女なんて、口を聞くもんですか！」

そついうと、階段を駆け下りて下へと降りて行ってしまったペチュ

ニアさん。

「・・・それじゃー、行こうか？リリー。」

リリー「ルナ！気にしないでね？行きましょう！」

「うん。」

頷くと、マグル世界を歩き進めて行き。

「・・・それで？ダイアゴン横丁には、どうやって行く気なの？」

リリー「煙突飛行を使おうと思ってるの。けど、私の家には煙突がないわ！」

「それじゃー、何処にいくつもり？」

リリー「エッジの家よ！彼女、マグルと魔法使いの子供なのよ！」

「エッジが？知らなかったな。」

話をしながらエッジの家に着き。

エッジ「あら・・・リリーに・・・ルナ！／／／」

エッジが私を見やり驚いてる。

「ごめんね？突然、来たりして。」

ニコリとエッジを見やり笑い言い。

エッジ「全然！／／ 煙突よね？！入って！」

エッジは、リリーが見えてないように告げ中へと案内を始める。

リリー「エッジ・私の事が見えてるのかしら？」

リリーが、私の後ろで小さく呟いてるのが私の耳にだけ届いていた。

義弟との再会

エッジ「ここの煙突を使つて？」

目の前には何年も使つてないような煙突があつた。

「戻るときはなんて言えば良い？」

エッジ「クラムタウンよ！この辺に煙突は家しかないの！」

「分かつた。ありがとう。エッジ。先に行くよ？リリー？」

リリーを見やり、煙突飛行の粉を持ち暖炉に向い言い。

リリー「ええええ。早く行つて頂戴！」

リリーは私を睨みつけて送り出す言葉を言う。

「それじゃー、“ダイアゴン横丁”！」

粉を振るい、大きな声で言うと、一瞬でその場から居なくなる。

リリー「それじゃー、エッジ！行つて来るわね？」

エッジ「リリーも気を付けて行つて来てね？」

エッジが見送る中、リリーが暖炉に立ち。

リリー「ダイアゴン横丁！」

そして、リリーも暖炉から姿が消えて、ダイアゴン横丁に現れた。

「リリー。早かったね？」

リリーを見つめながら問い。

リリー「ルナを待たせる訳にはいかないでしょ？」

灰を払いながらリリーが言う。

「それじゃー、行こうか。」

ダイアゴン横丁に出てホッグズミードへと向う。

「今回の薬草学の先生、誰が来るだろうな？」

リリー「ディラップ教授の後任でしょ？誰になるんでしょうね？」

歩きながら話していると……。

？「……お姉ちゃん？」

後ろから、男の人の声が聞こえる。何処となく聞いた事のある声だったので振り返った。

琉夜「……姉ちゃん！やっぱり姉ちゃんだ！」

そこには、はるかに私よりも大きく、大人のままの琉夜が居た。

「?!琉夜?!どうしてここに?・嫌・それよりも、何で大きい姿のまま?・」

琉夜「話す!けど、その前に!姉ちゃんVV」

琉夜は、嬉しそうに小さくなった私の姿を抱きしめてきた。

「?!琉夜!／／／私、ただじゃなくても小さいから・・・きつい・」

琉夜「ごめん・姉ちゃん・へへへVVやっぱり姉ちゃんだ!後姿を見た瞬間に分かった!」

「琉夜・落ち着いて・その・・・座って話さない?私の事も話すから?」

リュウヤ「うん!・・・あれ?後ろの子って誰?・・・もしかしてリリー・ポ!」

「リュウヤ!シッ!・それは、未来を変えることだから、言っちゃ駄目!」

リュウヤに耳打ちして突っ込み。

リュウヤ「そうなの?・・・んじゃ、挨拶しとくか!えっと、始めて!山梨琉夜・・・違った!リュウヤ・ヤマナシです!」

リリー「えっと、貴方が、噂のルナの弟さん?宜しく。リリー・エバンズよ。」

リュウヤ「？・・・ルナ？」

「それも、後で説明するから；『三本の箒』に行こう；」

リュウヤの手を引き、その道を歩いてたのがいけなかった。

シリウス「・・・ルナ？；」

そして、『三本の箒』の店に着き、良い席に座り義弟を見つめる。

「・・・それにしても、何時こっちに來たの？」

リュウヤ「昨日！いやー。目が覚めたら、ここに居たんだ！驚いた！」

「何で、大きい姿のままなの？」

リュウヤ「逆に聞きたいよ；なんで、小さいの？；」

「・・・私がこの世界に必要なだからじゃない？；」

リュウヤ「俺は必要じゃないのに呼ばれたの？」

「そういう意味じゃなくって；この世界は、見ての通り、ハリーの世界じゃない；」

リリー「ハリーって？」

「友達。兎に角！リュウヤがこの世界に來る事は、予想外だったんだ；」

リュウヤ「・・・ふーん？だから、俺の事を抜きにして、名前を変えた訳？」

「変えたんじゃないよ；イギリスだから、月をルナにしたんだよ？後、名字もラフランスで、山梨って考えたの！」

リュウヤ「ああ！なるほど！それなら、許す！」

リュウヤが笑いながら冗談を言い。

「はあっ・先が思いやられる；リュウヤが、この世界に巻き込まれたらどうしよう；」

リュウヤ「？・・・巻き込まれたけど？」

「?!何で?!」

リュウヤ「この世界に来た瞬間に、これが届いたんだ。」

言いながら、リュウヤがポケットから手紙を取り出し。

「?・・・嫌な予感；」

その手紙を受け取り、読んでみる。

『アルバスからリュウヤへvv 我友、リュウヤ・ヤマナシよ。薬草学の教師にわしは任命しようと思う。良いじゃろ?良いと言っじやろっvv わしの孫を見に来い!vv』

「・・・え？リュウヤは、薬草学の教師になるの？」

リュウヤ「みたいだな、んで、もしかして・・・生徒？」

「そうだよ？」

リュウヤ「なんていう事だ！お姉ちゃんを襲えないじゃないか！」

「あつ！それも！私、今は男としてすごして居るの！」

リュウヤ「え？それじゃー、抱きついたら駄目なの？」

「・・・まあ、英国だから、抱きつきぐらいは普通だけど、余りしたら。」

リュウヤ「やった！ルナ！これから宜しく！」

リュウヤは、私の話を聞かずに抱きついてきた。

「？！リュウヤ！重いから！」

本当の兄弟のように二人はじゃれあいを始めた。

リリー「・・・私の事、忘れてないわよね？」

多分、二度目の、リリーの放棄が始まったのは言うまでもない。

買い物

『三本の箒』で、義弟との再会を果たしたルナと、リリーは、ホグズミードを歩き始めた。

リュウヤ「ルナは、これから教材を買いに？」

「うん。リュウヤはホグズミードで住んでるの？」

リュウヤ「止めてくれよ！泊まってたんだ。ホッグズ・ヘッドにね？」

「・・・ホッグズ・・・ヘッド？」

リュウヤ「？何か、問題でも？」

「・・・否；ないけど；」（お爺ちゃんの弟の店だ。けど、リュウヤは、“最終巻”を読んでないんだ；）

自分の世界で読んだ本の事を思いだしながら言い。

リュウヤ「今度、ルナも遊びに来いよ？」

「いつかね；」

シリウス「・・・おい。ルナ。」

「？ああ。シリウス。久しぶり。元気してる？」

シリウス「後ろのそいつ、誰だ？」

シリウスが私の言葉を無視して聞いてきたのは、リュウヤの事だった。

「ああ。彼は、リュウヤ・ヤマナシ。私の・・・。」

リュウヤ「恋人だ。」

シリウス「なっ?!」

「ふざけないの；リュウヤ；」

リュウヤ「ふざけてないさ。・・・えっと？君が、シリウス君？ルナから話は聞いているよ。」

シリウス「名前で呼ぶな！ルナから離れろ！」

リュウヤ「嫌だね。君には関係ないだろ？」

「・・・その二人！。置いてくからねー？」

リュウヤ「あ！待って！姉さん！」

シリウス「・・・姉さん？」

リリー「彼は、ルナの義理の弟よ。ルナから聞いたでしょ？」

シリウス「・・・え？年下・・・には見えないよな？；」

リュウヤ「こつちの世界の俺は、姉ちゃんよりも年上みたいだ。」

「男だし、上から見られても嫌な気はしないから良いけどね？」

シリウス「・・・え？それじゃー、本当にルナの弟？」

「うん。義弟だけど。この姿のままだよ？」

リュウヤ「お姉ちゃんは、体、小さいよね？」

「少しね？20歳になっても伸びなかったから。」

リュウヤ「それは、女だから仕方がないよな？」

「仕方ないと言わないでよ；もう少しだけ身長、欲しかった。」

リュウヤ「成長薬か、骨生え薬を飲んでみれば？」

「そんなの、ずるいじゃん；自分の力で成長したかった。」

リュウヤ「そりゃ、無理だ。」

「酷くない?!」

シリウス「・・・本当に、仲が良いんだな。」

リリー「私達なんて、蚊帳の外よ？」

シリウス「・・・そうみたいだな。」

「だから・・・！」

シリウスは、ルナとリュウヤのやり取りを、ただ眺めるしか出来なかった。

「それで？シリウスは一人なの？一緒に買い物する？」

シリウス「ああ。けど、遠慮しとくぜ。兄弟水入らずを邪魔するつもりはないからな？」

シリウスは、そっぴうと立ち去った。

「・・・？私、なんか変な事、言っただ？」

リリー「？別に？それより、早く行きましよう？かなり時間を潰してしまっただわ！」

リュウヤ「ごめんなさい；こんなに遅くまでかかってしまっただ？」

リリー「？！／／／いえ・・・良いのよ。」

「最初に重たい物から済まそうか；」

私は、少しだけ気づいてたのかもしれない。

リリーが、リュウヤに心を動かされている事に。

それから、書店へ行き、本を選ぶ。

リュウヤ「ルナ。どれだけ本を買っだ？」

「え？授業のと、自分で読むの。」

リュウヤ「100冊ほどあるように見えるけど？」

「だって、去年は、学校生活で買い物できなかったし？今年の本と去年、入った本をね？」

リュウヤ「欲張って持つと、体、痛めるぜ？」

「んじゃ、リュウヤが持つて。」

ドサッ

をリュウヤに押し付ける。

本

リュウヤ「・・・押し付けられた。」

リリー「クスッ 大変なお姉さんね？」

リュウヤ「いつも、自分勝手だけど、前向きで頑張り屋で、誠実な人なんだ。」

リュウヤが、ルナを見つめて小さく言い。

リリー「・・・リュウヤさんは・・・ルナの事、好きなんですか？」

リュウヤ「好きだよ。ルナだけじゃなくリリーもね？」

リリー「?!良くそんな恥ずかしい事が言えるわね?///」

リリーは頬を染めてリュウヤと見詰め合っていた。

私の仲間

それから、暫くして必要な物は買い揃えた。

「ルーラ。リーナ。そろそろ魔法が切れるからどこか人気のない場所に行こうか？」

リュウヤ「？“ルーラ”？“リーナ”って？」

リリー「ああ。リュウヤさんは知らないでしたね？ルナには、梟が居ない代わりに狼とスノウバードって言う家族が居るの。」

リリーが後半の言葉は周りに聞こえないように言っているが、それはルナには何を言ってるかすぐにわかった。

リュウヤ「へえ。それは、見てみたい。」

「裏道に入ろう。ルーラとリーナが待ちくたびれてる。」

言っと、裏道へと歩み進んで行き人気のないところでタイミングよく、ルーラとリーナが元に戻った。

ルーラ『・・・窮屈だった。』

狼が首をもたげて呟き。

リュウヤ「・・・かつこいい！狼・・・！」

「静かに！！； 幾ら人が居ないって言ってもそれを言ったら駄目！」

リュウヤ「ちえ。宜しくな？えつと？」

ルーラ『私は、ルーラです。』

リーナ『お母さん！面白かった！』

「面白かったって・何回も出来る魔法じゃないんだよ？」

人間ほどもある白い鳥に向かって話し。

リュウヤ「君がリーナだね？宜しく。」

リーナ『・・・？お父さん？』

リュウヤ「？！おや。素直な子だ！」

「違うから！・リュウヤも否定して！」

リュウヤ「お父さんみたいな存在だろ？今は特に。・・・へんな意味で取った？」

楽しそうにリュウヤが聞いてくる。

「？！そんなわけないでしょ！お姉ちゃんをからかわないの！」

二人は再びリーナの存在を忘れじゃれあう。

リリー「それで？この二匹、どうするの？」

「ああ。そうだった。この二匹はこのままじゃ駄目だからね。小さくするよ。」

言つと、二匹に魔法を掛けて小さくする。

リーナ『私、肩に居る!』

パタパタと小さくなったリーナがルナの肩に捕まる。

ルーラ『私は、胸ポケットに入るわ。』

素早くルナの胸ポケットに登りその中に納まる。

「それじゃー、二匹とも。大人しくしてるんだよ?」

リリー「それで?教科書は買ったけど、後は何か買うの?」

「少し薬草を。」

歩き出し告げ。

リュウヤ「ルナ。俺は先に学校に戻るよ。」

リリー「え?何ですか?!」

リリーが慌ててリュウヤに問いかける。

リュウヤ「教師としてはまだまだ素人だからね・色々と準備をしないといけないんだ。」

リュウヤはリリーを見つめ説得する。

リリー「……教師ですから仕方がないですね。」

やっと納得の言った様子のリリー。

リュウヤ「ごめんよ。リリー。それじゃ、ルナ。明日、学校で。」

「気を付けてね？」

リュウヤ「クスクスッ ―教師なので気をつけますとも。」

言っと立ち去ったリュウヤ。

「ほら。リリー。戻ろう。リュウヤとはまた会えるから。」

リリー「?!……ええ。そうね……そうよね。」

リュウヤの背中を何時までも見つめているリリーが空を見つめ返事を返す。

その姿を遠くから見つめていた人物が居る事に……気付かなかった。

しばらくし、入学式が始まった。

「……完全に遅刻だ。」

ルナは、入学式当日、遅刻をしてしまった。

理由は、ルーラとリーナを何に変化させるかで口論しているうちに殆ど朝になってしまい寝る時間がなかったのだ。

「もう・あんなくだらない事で口論するんじゃないかった。」

ルーラとリーナは只今、梟とミニ梟の二羽になって居る。

ルーラ『私は何でも言いといってるじゃないですか・毎回、バリエーションを増やさなくっても宜しいですよ?・』

苦笑しながらミニ梟から声が聞こえる。

リーナ『私は、面白いけど?お姉ちゃん?』

嬉しそうに羽を動かすルーラを見やり言い。

「面白くないじゃん?あー・もう新人生の組み分け始まったかな?・」

「

早歩きで広場に向いながら言い。

そして、広場の扉を無遠慮で開け放つ。

バーバーバーンッ!

ジェームズ「・・・遅刻人がやってきたぞ?」

アルバス「ルナや。遅刻理由は?」

「寝不足&友達の説得。」

スタスタと席に向いながら説明するルナを新入生は驚いた表情で見つめる。

リーマス「おはよう。ルナ。ルーラとリーナもおはよう。」

ピーター「目立つ登場の仕方だね。」

「まあね。こんな登場の仕方しなくなかったよ。」

溜息を吐きジェームズたちに言い。

リリー「リュウヤ先生も笑ってるわよ？ルナ？」

言葉を弾ませながらリリーが私に言ってくる。

確かにリュウヤは私を見つめ微笑ましそうに見つめていた。

ジェームズ「?!誰なんだ?!あの男?!」

このジェームズの大声で再びグリッフィンドールが注目された。

好きすぎて・・・

「あの人は、私の義弟。今は、ホグワーツの教師になってるけどね。」

リーマス「それじゃー、噂の義弟君なんだ？ かつこいい人だね。」

「そう？ まあ、向こうの世界でもモテたのは確かだね。」

苦笑し、リュウヤを見やり言うルナ。

リリー「?! 彼女が居たの?! リュウヤさん?!」

「彼女は作らなかつたよ。私達の生活を少しでも支えてくれようと頑張ってたから。」

リリー「そう。」

リリーの表情は嬉しそうに見やり頷く。

「・・・。」

ジエームズ「・・・ルナ？ 気のせいかな？ リリーの目が、ハートになってるように見えるけど？」

「危ないね。リュウヤは、優しいし思いやりもある。恋人にはならないかもしれないけど、ジエームズの恋路の邪魔にはなるかもね。」

ジエームズ「そんな!..!」

シリウス「……。」

この時、私は気づかなかった。シリウスが、私を見ていた事を……。

そして、始業式は無事に、終わった。

「……ねえ？ ジェームズ。リーマス。ちょっと。」

リーマス「？ どうしたの？ ルナ？」

「……気のせいかな？ シリウスに私、避けられてる気がするんだ。」

ジェームズ「？ そういえば、こっちに近づかないな。」

リーマス「喧嘩でもしたの？」

「……してない。何でだろ。」

リーマス「……ルナ？」

「……。」

寂しそうな瞳でシリウスの背中を見つめるルナは、綺麗だった。

リリー「何やってるの？ 三人で？」

「ん？ なんでもないよ。リリー。授業、何をとったんだっけ？」

リリー「勿論、薬草学とー！」

元気よく、返事を返しながら廊下を歩き出す。

だが、その行く手を阻む物が現れた。

ルシウス「やあ。ルナ。久しぶりだな。」

ルシウス・マルフォイが目の前に現れ言ってくる。

「・・・何の御用事ですか？」

目の前に居る人物を見やり言い。

リリー「ルナ；」

「リリーは先に行ってる。」

リリーを見やり言う。

リリー「・・・教室で待ってるわ。」

言いながら、ルナの背中を見つめ言々と立ち去るリリー。

ルシウス「・・・流石は紳士と言った方が良いのかな？」

「・・・気が付いてるんですね？私が女だと言つことは。一体なんですか？」

貴方に溜息を漏らし問い詰める。

ルシウス「クックク。知ってるさ。だから、今回、君にこれを渡したくってね。」

言いながら何かの手紙を見せてくるルシウス先輩。

「?・・・わざわざ、この手紙を渡すためだけにきたのですか?」

その手紙を怪しみながらも受け取りながら訪ねる。

ルシウス「クックク。なんだ?抱きしめて欲しいならそう言え。」

「誰もそんな事は言っていないですよ?それでは、授業に遅れてしまいますので、失礼致しますね。」

ルシウス「本当につれない人物だ。」

そんな、ルシウス先輩の眩きを無視して、教室へと行った。

リリー「ルナ!大丈夫?;なんだったの?」

教室に入ると、リリーが心配そうに訪ねてくる。

「さあ?手紙を渡しに來ただけみたい。内容はまだ見てない。」

リリー「畏かもしれないわ!今日の夜に談話室で見ましょう?」

「そうするよ。持ってるのだけは嫌だけどね?」

苦笑しながら、リリーに相槌を撃っていると、リュウヤが入ってきた。

リュウヤ「やあ！皆！始めまして。リュウヤ・ヤマナシ。日本出身です。年齢は20歳になったばかりで、そんなに離れてないだろうから、仲良くしてくれ！」

にこやかに挨拶を始めるリュウヤ。

フランシス「クスクスッ 先生。すごく、明るい人ですね？」

リュウヤ「おう！可愛い生徒たちが居るからな！」

にこやかに話し語るリュウヤ。

ハンス「先生って、ダンブルドアはどんな関係なんですか？」

リュウヤ「いけない関係？」

女子「キャーキャーッ！」

女子の、テンション上がるような台詞を簡単に言うリュウヤ。

リーマス「大人気だね；義弟さん；」

「昔っから、冗談がうまくって、女子に人気があったからね；」

義弟である、リュウヤを見やり苦笑し言う。

ジェームズ「むうつ。俺たちの存在が薄れてる！悪戯仕掛け人とし

て悪しからず！」

「無駄無駄。私の、このテンションでさえ、押さえ込むんだから。」

苦笑しながら、ジェームズに話すルナ。

リュウヤ「ルナ君？僕の授業を聞く気はありますか？」

静かな声で、ルナを制するリュウヤ。

「ありますよ。先生こそ、授業を始める気はあるんですか？」

リュウヤ「おっと。口の悪い生徒だ。では、授業を始めましょう。」

言つと、薬草学の授業が始まった。

トローニーの予言

とても、有意義な薬草学が終わった。

リリー「はあつ。リュウヤ先生。とても授業が上手ね！」

「当たり前だよ。リュウヤは元の世界で教師をやってるんだから。」

リリー「ええ?! そうなの?! かつこいいわ。」

ジェームズ「僕だって勉強が出来るから、生徒に教える事ぐらい出来るよ! リリー!」

リリー「貴方じゃ、生徒に悪戯教える方が得意じゃなくって?」

ジェームズを睨みリリーが言い放つ。

リーマス「ねえ? リリーとシェンは、次の授業、何を選択したんだい?」

リーマスが、私とリリーに聞くのは、同じ選択だと確信があるからだ。

「占い学。去年は取ってなくて興味があつたんだ。」

ピーター「良かった! 僕も一緒だ、誰も居ないんじゃないかと思つてたよ。」

リリー「安心して? ピーター。私は全科目、必須してるわ。会わな

い事はないでしょう。」

リーマス「他にはどんな授業を？」

「闇の魔術に対する防衛術も取ってるよ。」

ジェームズ「それ！興味あるよね！一年の時にはとれなくなつて残念だつたよ！」

リリー「貴方達の場合、悪戯に使うからとらない方が良いでしょう！」

リリーはジェームズにきつく言い放つ。

ジェームズ「・・・なんだか、リリー、冷たくない？」

「リリーは、今、リュウヤにお熱みいだからね。」

ジェームズ「?! そんな！協力するつて言つたじゃん！」

リリー「何をさつきから騒いでるの?! 貴方達は別の授業でしょ！行くわよ！ルナ。」

「んじゃ、まあ、リリーの気がすむまでは、大人しくするんだね。ジェームズ。」

リリーに腕を取られながら歩いていくルナはそう言つて消えた。

ピーター「?! 待つてよ！二人とも！置いていかないでよ!」

二人の後を、短い足で追いかけるピーター。

ジェームズ「・・・あーあ。行っちゃった。それで？シリウス？何でそんなに不機嫌なんだい？」

リーマス「それ、僕も気になってた。ルナと一回も目を合わせなかったしね？」

シリウス「別に。なんでもない。それよりも、俺たちも次の授業に行こうぜ？魔法生物学だ。」

言いながらシリウスは歩き去ってしまう始末。

ピーター「どうしたんだろ？シリウス？」

ジェームズ「厄介な敵が現れて困惑してるんじゃない？」

リーマス「敵って；リュウヤ先生の事だよね？」

シリウスが居なくなった方向を見やり、三人は膨大な溜息を吐いた。

トレローニー「み・・・皆さん！始めまして。私は占い学のトレローニーと言います。占いに関して私の右に出るものは居ません！」

（若いな。トレローニー教授。彼女の予言は聞かないようにしないと。）

そんな、警報音を聞きながらも授業は静かに始まっていた。

トレローニー「では、コーヒークップと豆を使って簡単な占いから始めましょう。」

リリー「私、占いに興味があつたの。」

「私は余りないな。自分の招待がばれちゃうし、未来は・・・自分の力で変えて見せる。」

リリー「?!・・・ルナ？」

（そうだ。私は、悩んでなんて居られない。未来がどうであれ変えて見せる。）

ルナは、今の不安な気持ちを押さえ込んで考え込んだ。

そんな時、トレローニー教授と目が合ってしまった。

（・・・ヤバイ。）

ゆっくりと瞳を反らしたが・・・。

トレローニー「貴方！貴方の未来を今日は予言しましょう！さあ！コップを見せて下さい。」

「・・・はい。トレローニー教授。」

にこやかにコップをトレローニーに受け渡す。

だが、その途中に、コップを滑らせて落としてしまった。

「あ！すみません！・・・大丈夫ですか？・・・トレローニー教授？」

コップが割れたのを見つめながらもトレローニーに問いかけ。

トレローニー「いいえ。大丈夫です。レパロ。直れ。」

たどたどしい魔法でコップを直してトレローニー教授だが、コーヒ―豆は元の位置には戻らなかった。

「すみません。俺の所為で・・・怪我はありませんでしたか？」

そう言いながらトレローニー教授に尋ねてみた時。

トレローニー「貴方の中で、何かが変わり始めています。何人もの、魔法使いを犠牲にするでしょう。気をつけてください。」

耳元で、きつと私にだけしか聞こえない声で予言された。

「・・・何人もの魔法使いを犠牲にする代わり、助けてみせるので。」

「

トレローニー教示に微笑み言つと席に戻る。

リリー「・・・なんて言われたの？」

「他人を巻き込む悪戯が起きるでしょうって。」

リリー「それ！絶対に当たるわよ！」

リリーに小声で告げながら喋ってる途中、授業は終わった。

「次は、闇の魔術に対する防衛術だね。先生って誰だろうね？」

リリー「分からないわ。リュウヤ先生が良いけど、無理だし。」

ハグリッド「ルナ！ルナ！」

ハグリッドが大きな体を揺らしてルナに慌てて近づいてくる。

「?どうしたの？ハグリッド？」

ハグリッドを見やり問いかける。

その口から出てきた言葉は衝撃的だった。（リリーにとって）

悪戯仕掛け人

ハグリッド「ジエームズと、シリウスの二人が、わしの大事な動物を傷付けよった！」

リリー「！あの人たち、問題を起こしたの？！私も！」

ハグリッド「リリー。お前さんは駄目だ・ルナに任せたい。」

「リリー。私の席を取っておいて？」

ハグリッドがこう言う事を言うのは何も初めてじゃない。

リリー「・・・あの人たちにきつく言っとくわ！先生にも言っとくからね？」

「ありがとう。リリー。お願いするよ。行こう。ハグリッド。」

リリーに背を向け、歩きさっていくルナ。

「それで？一体、何に攻撃もしくは悪戯したの？」

ハグリッド「・・・ここでは口にだせん！」

「？一体、何？」

少し、疑いの瞳で、ハグリッドを見やり首を傾げて居る間にハグリッドの小屋についた。

ハグリッド「こっちだ。」

顎で示す方向は、禁じられた森の方向だった。

「・・・まさか、中に入るなんて言わないよね？」

ハグリッド「禁じられた森へは生徒は連れていっちゃらん！；手前においちよる。」

ハグリッドは慌てながら付け足しルナに言う。

そして、禁じられた森の手前の所に、黒い物体が居た。

「・・・蜘蛛・・・だよね？」

悪戯されて蜘蛛が何か分からなくなったその物体は酷く小さい生き物だった。

ハグリッド「アラゴグだ；まだ、体が小さいからわしが面倒をみちよるんだ。そしたら、あの悪戯坊主共が！；」

「分かったから。兎に角、処理しないとね。」

アラゴグの周りは、酷く荒らされていた。きっと、糞爆弾でも投げられたのだろう。

アラゴグ『・・・近づくな。噛み付くぞ。』

「生意気。助けてやろうとしてるんだから大人しくしとけ。」

言いながら、蜘蛛のアラゴグを怖がる事をせずに近づく。

「スコージファイ、清めよ。」

アラゴグの回りを綺麗にしていく。

ハグリッド「わしのアラゴグ！大丈夫か？；」

「ハグリッド。アラゴグを飼っているのはお爺ちゃんを知ってるの？」

ハグリッドを見つめ、糞爆弾で酷かったアラゴグの周りは綺麗になり問う。

ハグリッド「勿論、知っちやる！言わないわけがなかるう！」

「そう。それで？アラゴグをどうするの？このままここで飼うの？」

首を傾げアラゴグを見つめ問いかける。

ハグリッド「・・・アラゴグは、大きくなれば、人間も食うかもしれない。そんな事になるようなら、俺がこの手で、禁じられた森に離すつもりだ。」

「そう。早いうちの方がいいよ？ハグリッドは親の気持ちになりやすいんだから？」

首を傾げ、片付いた茂みを見やり言う。

「それじゃー、戻るよ。ハグリッド。リリーの雷も落ち着いた頃だ

し？」

ハグリッドをもう一度、見やり身を翻してホグワーツへと戻った。

（ふうっ・遅くなったな。授業が始まっちゃう・急がないと。）

早歩きで学校内を歩いて行く。

もう、校内をうろついている人物は誰も居ない。

教師以外は。今、捕まれば、確実に授業には出れなくなるだろう。

「それにしても・・・誰も居ない。」

静まり返った校内を寂しいと思ってしまうのは、私がこの世界に・・・。

そんな事を考えながら、闇の魔術に対する防衛術の教室へとやってきた。

ガチャッ

ポフッ

教室に入った瞬間、何かに顔をぶつけた。

柔らかいものだから、多少は痛いものの殆ど痛くはなかった。

アイリス「やあ。君が、遅れて来たルナ・ラフランスかい？」

目の前の男は、とてもかつこいい人物で、この場には相応しくない

人物だった。

「はい。自分が、遅れてしまった人物です。それで・・・？」

アイリス「ああ。話は中に入ってからで良いかい？さあ、どうぞ？」

闇の魔術に対する防衛術の教室に入ると、グリツフィンドールだけではなくスリザリンの生徒もこの教師らしき人物に見惚れていた。

アイリス「さあ？座って？」

目の前の男は、リリーの隣に座らせてくる。

「・・・誰？」

リリー「闇も魔術に対する防衛術の新任教師よ？まあカッコいいけど、リュウヤ先生には劣るわね？」

リリーは頬杖をつきながら説明する。

「この人が・・・見た事ある？」

リリー「ないのよ。去年も一回も。こんなにかっこいいのにね？」

アイリス「皆、俺の噂をしてるようだね。俺は、去年から居たんだけど、部屋から出るのが嫌いだね？殆どの子は知らないだろう。」

苦笑しながら説明する間も、女子生徒の視線は釘付けだった。

イケメン教師

アイリス「それでは、皆が揃った所で自己紹介をしようか。」

教卓に向いながら、真面目に話し出す教師。

アイリス「僕の名前は、アイリス・カルシファーだ。宜しくな。」

女子生徒「アイリス先生は、恋人、居るんですか？」

アイリス「クスツ　どうだろうね。居たら嬉しい所だけど。」

女子生徒「先生は、何で、部屋から出るのが嫌いなんですか？」

アイリス「吸血鬼でね。日の光に当たれないんだ。」

リリー「クスツ　面白そうな先生ね。」

「そう？」

アイリス「それでは、授業を始めたいと思います。」

こうして、不思議な教師、アイリス先生の授業が始まった。

アイリス先生の授業は、何の問題もなく終わる。

アイリス「では、今日の授業は終わりです。」

「それじゃ、俺、変身学だから。」

アイリス「あ。ルナ君。待ってくれないかい？」

「？なんでしょうか？」

アイリス「少し残ってくれるか？」

「構いませんよ。」

ジエームズ「それじゃ、俺たちは、先に行くよ？マクゴナガル教授に怒られちゃうからね！」

「良いよ。先に行つてて。」

ジエームズを軽く見やり促す。

リーマス「それじゃ、気を付けて来てね？」

「ありがとう。」

悪戯仕掛け人たちが、教室から出て行つた。

アイリス「アルバス・ダンブルドア教授に君を見守るように言われたんだ。」

「？何故、突然？去年は、手が回せなかったんですか？」

アイリス「さあ？あの人の考えてる事は、よく分からないから。」

「貴方は、本当の仕事は？」

アイリス「それは、秘密なんだよ。勿論、闇の力を抑える事に、努力してるけど？」

「・・・闇の帝王といえば？」

アイリス「まだ、名は知れていないが、トム・マールボロ・リトルだろ？」

「・・・信用はしましょう。ですが、見張られるのは、嫌いです。」
そこまで言うと、踵を返しルナは、廊下を歩いて行った。

アイリス「ヒュー。かつこいいね。」

（なんなんだろ？； あの人、嫌な感じ。）

アイリス「かなり、警戒されてるね；」

授業が進む中、ジェームズたち、悪戯三人組が問題を起こした。

フィルチ「お前たち！また、悪さをしたのか！」

リリー「あの人たち、悪さしたの？一体、今度は何を悪さしたのかしら？」

「さあ？」

リュウヤ「やあ。ルナ。こんな所で会うなんて奇遇だね。」

ヒョッコリと授業が終わったのか、リュウヤが教室を覗いてきた。

「リュウヤ。どうしたの？」

リュウヤ「姉さんの授業を受けてる姿が見たくってね。」

「自分の時だつて見ただろ・それに、あまり姉さんって呼ばないでくれ。」

リュウヤ「ごめんごめん。」

「もう・リュウヤ先生、モテるんだから、目立つ行動は控えたらどうですか？」

リュウヤ「まさか、ルナ君に言われるとはな。」

廊下と教室で笑いあう、姉弟。

アイリス「……。」

「……。」

そして、その向こう側に見えた教師、アイリス。

アイリス先生は、何事もなかったようにその場を立ち去った。

「……リュウヤ。お願い。あの人を見張って？」

リュウヤ「アイリス先輩？いいけど、何かあったの？」

「私の事、見てるの。何の用か分からないからね。探って？」

リュウヤ「はいはい。ルナの言う通りに。」

そこまで言つと、アイリスの消えた方向へと消えていくリュウヤ。

シリウス「……。」

ジェームズ「気が気じゃないみたいだね！シリウス。」

シリウス「あつ？！別にそんなじゃねーよ！」

リーマス「本当？それなら、僕、ルナに告白してみようかな？」

シリウス「ふざけた事、言ってるんじゃないよ！」

ピーター「ちょっ；喧嘩は止めなよー；」

こうして、少しだけ教室の中が騒がしくなったのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7845e/>

愛しの義弟

2010年10月11日20時53分発行